

患者さんの日々のケアの様子を見守る長田さん。玉穂ふれあい診療所では、一怒の家庭のような作り手の部屋で、最期までの時間を過ごすことができる



# 禁止使用体字

医療ジャーナリスト  
**伊藤隼也**が行く!  
ニッポンの医療現場 第10回

## 真の終末期医療を問う あるホスピス診療所が実践する “患者の希望を叶える”医療

いまや日本人の3人に1人ががんで亡くなる時代。最期をどこでどのように迎えるかは、大きなテーマだろう。ある小さなホスピス診療所の取り組みを通じ、真の終末期医療とは何か考えたい。

管につながら最期を迎える  
わが国の悲しすぎる現状

医療技術の進歩により、我々は長寿という恩恵に浴している。その一方で、「スバゲッテイ症候群」という悲しい言葉があるように、生命を維持する多数の管につながら意識もなのまま死を迎える人たちがたくさんいる。おまけに国民の8割が病院で亡くなっているのが現実だ。

人間は必ず死を迎えるが、その選択肢の一つに、ホスピスでの死がある。ホスピスとは、ヨーロッパ発祥の医療施設で、がんの末期など命に関わる病気に直面している患者と、その家族のQOL（生活の質）の改善を目的とする。

ともすると治療手段がなくなり、死を待つだけの場と捉えられがちだが、本来は最期までその人らしい生活ができるよう医療や看護によって支える場である。

「その人がその人の生活を樂しみながら最期を迎える」とことはどういふことか。その答えのヒントが、小さなホスピス診療所にある。

山梨県中央市。富士山や南アルプスを一望できる自然豊

いとうしゅんや●医療ジャーナリスト・写真家 国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv/



玉穂ふれあい診療所のスタッフは、常に親身になって患者さんの声を聞いている

かな土地に、ホスピス診療所「玉穂ふれあい診療所」がある。暖炉がある板張りの広間や天然温泉を引いた露天風呂があり、診療所というより旅館の風情だ。目の前にある家庭菜園では患者や家族、スタッフ、ボランティアの人たちが、野菜作りに励んでいる。驚いたのは、スタッフばかりでなく、患者も笑顔を見せていることだ。

ふつう、がんなど病気が全身を侵すようになると、耐え難い痛みが出てくる。また精神的な負担からうつ状態になったり、眠れなくなったりすることも多い。こうした場合、モルヒネ（医療用麻薬）や鎮痛薬、向精神薬、睡眠導入剤などをうまく用いて患者の苦痛をとる。ここではこうした「緩和医療」が徹底されている。



診療所の露天風呂の前で患者との思い出を語る長田さん。温泉はボランティアの人たちの手で引かれた

聞こえた。「ここでは緩和医療がほとんど行われていなかったように、Aさんはむくみでばんばんになった体を丸めて、ガーンと口を押さえ、声を押し殺しながら「痛い、痛い」と……」

転院後、痛みやむくみを取る治療で気力を取り戻したAさんは、露天風呂に入り、婚約者と夏の花火を楽しんだ。そして婚約指輪をはめて旅立っていったという。

他にも、緩和医療を受けながら最期まで診療所の会議室で重役会議を開いた60代の社長。非科学的な治療に苦しめられ、心も体も疲れ果てた状態から立ち直り、富士山に行くことを心待ちにしたながらその前日に永眠した40代の女性……。誰もが生活をまっ



患者に寄り添って、どんな希望を抱いているのか聞き取る長田さん。患者と接するときは常に笑顔だ

とうし、「ありがとう」という言葉を残し最期を迎えた。行政は現場を知らずに終末期医療を推奨する

玉穂ふれあい診療所にあるような穏やかな最期の迎え方は誰にとっても理想だろう。しかし、一般的なホスピスはどこも満床か費用が高額で入ることは難しい。一方、診療所ではホスピスを開設しても診療報酬が低くほとんど運営は不可能に近い。同診療所では在宅看護などの事業を併設し、ボランティア組織に支えられようやく運営が成り立っている。長田さんはこう話す。「こうして患者さんと接してきて思うのは、これは必要な医療だつてことです。でも、なかなか行政にはそれに気付いてもらえません」

わが国の医療政策は昨今、がん対策に力を入れ、病院の緩和病棟設置や在宅の緩和医療など終末期医療を拡充する方向で進んでいる。かかりつけ医の看取りを制度化し、保険点数を引き上げたものの、緩和ケアの専門医、専門看護師は相変わらず不足しているままで、現場の医師や看護師からは、「人も費用も不足している状態で、24時間どうやって運営すればいいのか」「このままではこっぴが死んでしまう」という声も聞こえる。まさしく「仏作って魂入れず」だ。限られた財源の中で、理想の医療を行うのは難しい。しかし、大都市や一部の地域に見られるように、それぞれの医療機関がまったく連携せず患者が路頭に迷うことも少なくない。同診療所のような成功モデルがいくつもありながら、理想の医療を実現できないのは、わが国の医療に真のリーダーが不在ということに他ならない。

伊藤隼也最新著作「医者も知らない? 治せる認知症!」(小社刊)が好評発売中